

「母乳で足りないなら、人工乳（ミルク）を足して飲ませないと」となりました。さあ、私も2度目は、素直に「はい」とは返事が出来ません。オムツやゲップの例でも分かるとおり、2度トライして効果がなければ、いくら泣いていようが放置した私です。私なりに「お腹がすいて泣いている」わけでないかと判断して、「大丈夫だから、あげません」と、きっぱり。この私の対応が、三女が泣くたびに、両親の「何が何でもミルクを飲ませる」行為に走らせてしまいました。

その結果、1ヶ月検診で、標準で生まれたはずの三女が、通常の2倍の体重に増えていた事が分かりました。私は育児指導で、子どもの適量とされる1回分の授乳量がどれくらいか、また、授乳量を測りたいときはボトルに取る事など、教えられていたのです。夫の両親に伝えるべき言葉をもっと慎重に選べば、「飲ませる、飲ませない」という行為だけに、お互いが固執する事もなかったかもしれません。

この長女と三女の2つの例から、とても大切な問題が含まれていたのだと、自覚しました。私にはコミュニケーションの力が欠けていて、自分が問題だと思った事を「解決」できていない、しようとする姿勢も持っていなかったのです。原因はいろいろあるのですが、私の育った環境がその力を身につけさせなかったことは、確かです。

<どこかで聞いたような話>

アメリカ育ちの3人娘がよく、「お母さん、いつも漠然としたイメージだけで話すのよね。分かってないでしょう？」と言います。

例えば、朝食について長女ともめたのが良い例です。私が、「朝食を食べてから学校へ行きなさい」と言うと、長女は、「朝食を食べると昼頃にどうしても眠くなるから、いらぬ」と、返事をします。そこで「朝食を抜くと健康によくないのよ」と私が注意すると、娘は、「私は肉体労働者じゃなんだから、3食をしっかりと食べる必要はないでしょう。1日に必要なカロリーを2回に分けて食べる事に、何か問題でもあるの？」と問い返します。それに対して明確な答えを返せない私は、「早く食べないと遅刻するよ」と号令をかけます。朝食を食べ終わるまでは学校へ連れて行ってもらえないので、長女は仕方なく、ぶつぶつ文句を言いながら食べます。という事を、毎朝のごとく繰り返します。

これでは、娘からすると、私と実家の母や夫の両親との関係の逆バージョンに見えるはずで、とてもまずい事になって

しまいます。同じ愚を犯すのは、私の望む育児ではありません。そこで、考えました。

「朝食を食べる」のは、私が母から躰けられた私自身の「習慣」で、それは「良い習慣」だという「思い込み」に過ぎないのでは。それで、食べ物が口に入ってから軌跡を調べる事にしました。いろいろ調べた中の一つに、「食事は1日3食、身体に適した量を摂る事が大切。まとめ食いや大食は、1度にたくさんのインスリンが必要となり、すい臓に負担をかける（栄養相談室より）」と、ありました。腎臓に軽い持病を抱えた長女に調べた事を説明したり、ついでに栄養学や料理の本を買ってやりますと、私が望んだような食習慣を実践するだけではなく、健康についていろいろ話しをする機会が増えました。

私が漠然としたイメージで話すのは、何も考えていないのではなく、相手に伝える話し方を知らないだけです。私を鍛えるためなのか、いい加減な返事の仕方をしますと、3人の子どもから「なぜ？ どうして？」「そんな時は、こういう話し方をするのよ。」「お母さん、スキル・アップしなくちゃ！」と、矢継ぎ早に言葉が飛んできます。



子ども達が考えるコミュニケーションの仕方がどのようなものか、私自身はまだよく理解できていません。ただ、せつかく相手をしてあげようという子ども達がいるのですから、習わない手はないですね。

松本 康子
まつもと やすこ

1979年、夫の留学で、1歳半の長女を帯同し渡米。その後、アメリカで次女、三女を出産。専業主婦として子育てと教育を担当。子ども達は、親から見てうらやましいバイリンガル・バイカルチャーの大人に育ちました。しかし、「アメリカで日本人の子どもをバイリンガルに育てた」私が、実は、子どもに育てられていたのです。このコラムでは、「海外でともに育った母と子」の悪戦苦闘の姿を紹介させていただきます。皆さんの海外での子育ての参考になりますでしょうか？



今回は、このコラムのテーマ「海外でともに育った母と子」にぴったりの、康子さんの体験談です。

自分自身が、親から教えられたり、育ってきた環境の中で身につけてきた考え方や価値観を、時代や環境が変わる時や異なる価値観に遭遇した時に、変えて適応していかなければならなかった康子さんの子育ての戦いです。

時代や環境の違いを含めた、自分自身が持っている文化と異なる文化が「異文化」だと考えると、康子さんの戦いは、自分自身の「異文化適応」への挑戦でもあったのです。

そして、その戦いは、子育ての終わった(?)今でも、育てた子どもを相手に続けているようです。いつ終わるのでしょうか？

まさに、「ともに育った母と子」の物語でした。